

山田村の情報化— 3年間の変化と適応—

5H-8

小松裕子

小郷直言

高岡短期大学産業情報学科

大阪大学大学院経済学研究科

1. はじめに

富山県山田村は、情報化の一般的なレールに乗って情報センターを設置し、内部に講習室を設けて村民の利活用を促すという定形的な方法とは異なる手順をとってきた。この3年の間、山田村では、村外者の支援をうまく吸収しながら情報化が進められており、村民のパソコン利用形態にも変化が見られるようになった。特にメーリングリストを介した会話は、人々が村に集まる機会を作り、村内のコンピュータ利用の促進と広がりを実現している。

2. 情報化の経緯と人的ネットワークの変遷

山田村は、平成8年1月に国土庁から情報化モデル地区の指定を受け、希望する全ての家庭にパソコンを配付した。

(1) 情報化1年目

平成8年7月、約350世帯へパソコンが配付された。一部では、村の計画に当初から関わっていた強いリーダーシップをもつ人材の下、カレンダーづくりなどを目標にした小グループでの勉強会が開かれた。村当局では、全村に散らばる24の集落毎に、1~2名の「パソコンリーダー」を選び、パソコン利用の気軽な相談相手として互いに教え合うという体制を作った。これは、昔からある生活共同体をうまく利用したものである。この1年は、個人それぞれに利用と学習がまかされた時期であった。¹⁾

(2) 情報化2年目

平成8年12月に情報センターが設立し、平成9年6月全戸のネットワーク接続工事が完了した。その夏、村に関心を寄せる学生が集まり、「ふれあい祭」を開催することになり、村では「お手伝い」という意味の「こうりやく（合力）隊」が学生を支援した。これをきっかけに、学生と村民の交流が始まり、双方の連絡には電子メールが使われた。

「ふれあい祭」の目標の一つは「村の情報化を助ける」ことで、村の各家庭を「お助け隊」と名付けた学生等が訪問し、パソコンの基本的な扱いやネットワーク設定など、約100軒の家庭を支援した。²⁾

(3) 情報化3年目

平成9年11月の文化祭のために、実行委員を中心にした講習会が催された。村では正式の講習会はこれが初めてである。講師は村に関心を寄せる村外の社会人グループが担当した。文化祭では、講習を受けた「こうりやく隊」や「パソコンリーダー」が他の村民に向けて、情報コーナーを設けたり、寸劇を催してパソコン利用を呼びかけた。文化祭後、各集落単位で電子メール講習会を実施したことで、村内でパソコンを利用する人が徐々に増えていった。また、その頃「山田村メーリングリスト」が始まり、村外の社会人と村民の間で、ネットワークの輪が急速に広がっていった。以下では、そのメーリングリストが村民に受け入れられてきた状況を述べる。

3. メーリングリストの選択へ

(1) 山田村メーリングリスト

「山田村メーリングリスト」は、平成10年12月でほぼ1年になり、メンバーは165名で村民が約60%を占める。特徴は、メンバーの全員が実名で、村外者のほとんどが支援などで村に足を運んだことがあり顔見知りであるという点である。また、気軽に質問できる雰囲気を作り上げようという意識がメンバーにある。村外者がメーリングリスト上で村の行事を知りそれに参加したり、メンバー同士の会話から、新しい行事（たとえば、蕎麦打ち会や芋煮会、山田村探索ハイキングなど）が次々と生み出され実施されている。現在は月に1度~2度のペースで何らかの行事が実施され、ネットワークと実生活の行事が自然に融合したものとなっている。³⁾

(2) 村民の意識の変化

メーリングリストの利用は、交流を村内外に広げることとなり、村民の意識も利用形態も明確に変化してきた。その一例をあげると、

・Fさん(60歳代女性)；今はメーリングリストが一番楽しい。電子メールを始める1年前は、カレンダーを作ったり、店(美容院)のお客さんに、着付けに必要なものを書いて配ったりするだけで十分だと思っていたけれど・・・。

・Tさん(50歳代男性)；初めは店のポスターを学生に作ってもらった。自分の家のパソコンでこんなことができるなんて本当に驚き嬉しかった。今は家族でパソコンの取り合いである。電子メールで、若い学生さんと同じレベルで話している、こんなに楽しいことはない。

・Mさん(40歳代女性)；メーリングリストに加入したことで、私の生活がすっかり変わった。村の行事に積極的になったし、今年は総代(集落の班長)で、いろいろな資料をパソコンで作成した。とにかく満足感が大きい。パソコンを使わない村の人に、この楽しみをなんとか教えてあげたい。

(3) メーリングリストを利用した情報化への適応

交流の広がりや意識の変化は、一般に考えられる情報化と比べれば、副次的なことに思われる。しかし、メーリングリストで交わされた会話から実現した行事を村民自らが楽しみ、支援者を引きつけ、さらに新しい行事へ発展していく。結局、それがごく自然にコンピュータの利用と村民への広がりを実現しているのである。

4. 新しい問題と模索

ネットワークを媒介に広がる交流により、村の中に着実に情報化が息づき始めている。一方で解決しなければならぬ問題や新たに起こりはじめた問題も多い。最後に問題点とその対応の状況を述べる。

(1) 村民間のレベル差と無関心

徐々に利用者が増えている半面、パソコン離れや無関心者も増加している。特に、情報の推進役である「パソコンリーダー」のレベル差が問題となっており、集落全体の差にも現れている。その対策として、パソコンリーダー同士で勉強会を始めている。

(2) 高齢者問題

高齢者の多くは、家族に気兼ねしながら1人では

決して利用しないという人がほとんどである。いまだ箱に入ったままの家庭もある。しかし、できるなら文字を打ったり写真を取り込んで年賀状などを自分で作りたいという要求を持つ人も多い。現在、「一人一人のペースと要望に合わせた「やさしいパソコン教室」に取り組み始めた。

(3) 村外学生と社会人の興味の継続

これまで、小さな農山村の情報化という珍しさもあって多くの村外者の関心をつかみ、村の情報化にその支援をうまく利用してきたが、今後新たに村外者の興味を引きつけ続ける努力が村に求められる。

(4) メーリングリスト離れ

徐々に発言する村民が少なくなり固定化し始めている。また、村を訪れたことのない学生の加入が相次ぎ、メーリングリスト自体の雰囲気が変わってきたことやメンバー増加により気軽に発言しづらいという村民の声も聞かれるようになり、離脱の危惧も生まれている。現在のところ、次々と企画される行事がそれをつなぎ止めているといった状況である。

5. おわりに

村が情報化を進めて3年が過ぎた現在、村民が結果的に選択した道具はメーリングリストであった。しかしながら、最近、発言メンバーや会話内容に変化が見られるようになっており、新たな軌道修正の時期にきていると思われる。これまで、山田村の情報化は、あらかじめ青写真を決めて進むのではなく、様々な活動を通して、そのときどきで適切な支援を得ながら、自分達の生活にうまく取り込み適応させて進んできたと言える。われわれは今後、国内外の事例等とも比較しながら、村外者を含めた村の情報化の実地調査を継続する必要性を感じている。

参考文献

- 1) 小松裕子・小郷直言：情報技術の導入時における社会的支援の在り方, 高岡短期大学紀要, Vol. 10, pp99-116, 1997.
- 2) 小松裕子・小郷直言：電腦山田村への道, 大阪大学大型計算機センターニュース, Vol. 27 No. 2, pp19-32, 1997.
- 3) 小松裕子・小郷直言：山田村が抱える情報化3年目の現状と課題, 日本社会情報学会関西支部研究会, pp7-14, 1998.